

動

商家町

時代の波に寄り添って変化するまち



軒切された町並み



本来はこの辺りまで軒があった

時代の変化に合わせ、歴史を守り、生かす

これからのまちづくり

平成23年に立ち上げたまちづくり協議会では、防災防犯・福祉・まちづくりの3つの部会で活動しています。江戸から明治・大正・昭和と、大きく変化する時代に対応してきた、まちの気質を受け継ぎ、歴史を生かした新しいまちづくりに住民一丸で取り組んでいます。

津山まちの駅城西（作州民芸館）での野菜と魚の市、まちの駅城西浪漫館などでの野菜や弁当の販売は、地域の商店が次々と閉店する中で、交通手段がなく困っていた地域の高齢者の声を受け、まちの象徴的な建物を活用して始めたものです。津山城西まるごと博物館フェアなどのイベントに加え、町家を活用した飲食店やギャラリーの開業、作州餅の復興、宗派を超えた若い僧の活動など、新しい取り組みも広がっています。重伝建の選定を受け、まちづくり部会では、歴史を生かす景観の整備、土産物の開発やイベ

景観の整備、土産物の開発やイベ



津山市城西まちづくり協議会会長 高須昌明さん

ントの企画など、新たに人を呼び込む方法を話し合っています。城西浪漫館では、津山藩医学博士宇田川榕菴の記録を元に江戸時代の味の再現に取り組んだ「榕菴珈琲」を提供しています。津山洋学資料館や榕菴の話にちなんで珈琲を提供する店などがある城東地区と協力しながら「珈琲のまち津山」を楽しんでもらう仕掛けを作っています。建造物の維持、細い街路への緊急車両の進入方法など、歴史の跡を残すことへの課題もあります。先人たちが築いてきたものを守り、生かしていく方法を、みんなで知恵を出し合いながら考えていきたいです。



作州民芸館

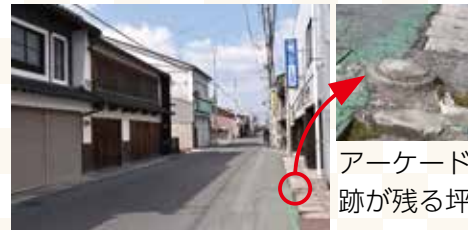


土居銀行だった作州民芸館（写真右）と銀行が開行したときから残るカウンター（写真上）



たくさんの人力車が停まる大正9年頃の津山駅（現在の津山口駅）（江見写真館蔵）

昭和11年頃の坪井町アーケード（個人蔵）



アーケードの柱の跡が残る坪井町

探してみよう

金庫があったことを示す外壁の装飾



土居銀行だったことが分かる装飾



大正15年に架けられた翁橋は国の登録有形文化財。アスファルト舗装の路面の下から全国的にも珍しいレンガ舗装が見つかった。



明治以降、2階に座敷を設ける町家が増えた。改築前の屋根の位置が壁にうっすらと残っている。



1軒の町家（写真右：大正6年頃）を昭和23年頃に改築して2軒で利用（写真左）。奥側の家の2階の覆いの後ろには、昔ながらの建屋が隠れる。

鉄道の開通で発展した商家の町

江戸時代、城西地区に住む商人は、城東地区に比べると、小規模な商人が多かったようです。この流れが変わったのが、明治31年（1898）の中国鉄道（現在のJR津山線）の開通でした。それまで、遠方への人や物の移動手段は吉井川の舟運（高瀬舟）が主流で、城東地区が津山城下の玄関口として栄えていました。

しかし、鉄道の開通でまちの玄関口が、津山駅（現在の津山口駅）に変わります。これにより、境橋を渡り、城西地区を通って旧城下町の中心に向かう人や物の流れが生まれ、城西地区の商家が一気に発展していきました。作州民芸館は、明治42年（1909）に建設された土居銀行津山支店で、当時の城西地区の繁栄ぶりを示しています。昭和7年（1932）には、坪井町に津山初のアーケードができ、「津山銀座」と呼ばれるほどでした。

将来を見据え車社会に対応

時代の流れに合わせた町の動きとして特徴的なのが、西今町の「軒切」です。町全体で家の軒先を短く切り取ったのです。大正から昭和にかけて徐々に自動車普及していき、人や物の移動による町のぎわいを保つため、トラックやバスなどの大型車が通るのに邪魔な軒を、町で一斉に改修しました。津山市議会の議事録から、昭和12年（1937）頃のことだったようです。

未来に向けた保存と活用

歴史的に価値がある町並みを地域の資源として観光などに生かしながら残していく取り組みを、地域の皆さんと一緒に進めていきます。

皆さんも城西地区を歩きながら、津山の歴史の移ろいに触れる小旅をしませんか。